第３章　証言及び手記

沖縄戦に関する証言や手記についてはこれまで数多く出版されているが、本誌はこの中から、援護課が携わってきたこれまでの援護関係の事例と係わるような証言あるいは沖縄戦特有の犠牲の実態を証言したものを、本人や編著者等に了解を求めて再掲するものである。

一般住民の戦争被災や、サイパン等での外地における被災等があり、学徒隊の行動や思いを記した記録等もある。

その中には、集団自決という狂おしい体験を語ったものもある。

また、傷を負いながら、戦後苦しんだ生活や逆に逆境に負けない力強さ等を綴った手記もある。

そして、抑留体験を語った長文の手記もある。

さらには、戦後５０年にわたってなおかつ終わらぬ遺骨収集の思い出も語られ、慰霊塔建立の苦労等も語られている。

そして、戦後処理問題として戦後５０年の節目に解決された八重山地域の戦争マラリア問題の当時の実態もある。そして、未だ解決できない戦時遭難船舶犠牲についても未発表の手記を掲載した。

いろんな戦争犠牲の実態を網羅していく中で、心が沈みがちになるが、未来につながる子ども達の真摯に見つめる沖縄戦の教訓とこれからの平和への希求が救いである。

ここに掲載した証言及び手記を読み、そして最後に載せた「６月の風の中で」を何度も読み返しながら、戦後５０年が何だったのか、みんなで考えたいものである。

一　覧　表

	書　名	編著者等	証言者等	題　名　等	頁
1	証言－沖縄戦	親泊一郎 仲村渠 理	大城シゲ	伊江島女子救護隊	176
2	ぶっそうげの花 ゆれて	退職教職員会 婦人部編	久保田 千代子	教育勅語を守って	177
3	ぶっそうげの花 ゆれて	退職教職員会 婦人部編	与儀春子	山原避難記	179
4	ぶっそうげの花 ゆれて	退職教職員会 婦人部編	赤嶺とみ子	生命はこんなに強い ものなのに	183
5	平和への証言	生活福祉部 援護課	仲間光利	日本兵が幼児殺害	187
6	平和への証言	生活福祉部 援護課	長嶺オト	最後の斬込隊	187
7	市民の戦時戦後 体験記録　第二集	石垣市市史 編集室	小浜雪子	死のサイパン島で	188
8	沖縄・八十四日の戦 い	榊原昭二	金城重明	渡嘉敷島の集団自決	194
9	平和への道しるべ－ 白梅学徒隊の記録	沖縄県立第二 高等女学校	與那覇政男	教え子たちよ	196
10	嗚呼沖縄戦の 学徒隊	金城和彦	金城和彦	沖縄戦の学徒たち	197
11	友、一中一条会	安里祥徳	安里祥徳	学友たち戦友たち	199
12	ひめゆりの塔を めぐる人々の手記	仲宗根政善	金城素子	看護要員	202
13	想い遥か還らぬ人を	沖縄県遺族連 合会婦人部	照屋 秀	テニアン島を追われて	209
14	榮光　　第２号	沖縄傷痍 軍人会	仲地豊吉	傷痍軍人の足代わりに 馬を	211
15	いくさやならんどう	創価学会婦人 平和委員会編	安里由紀子	長袖に包まれた左腕	212
16	平和の礎　海外引揚 者が語り継ぐ苦労Ⅴ	平和祈念事業 特別基金	平良武雄	私の戦争体験	214

	書　名	編著者等	証言者等	題　名　等	頁
17	市民の戦時戦後 体験記録　第三集	石垣市史 編集室	宮城　文	惨めな境遇の台湾疎開	221
18	県民遺骨収集	生活福祉部 援護課	野村　朝賢	県民遺骨収集に参加 して	227
19	県民遺骨収集	生活福祉部 援護課	中村　文子	小骨を拾い尽くすまで	227
20	想い遥か還らぬ人を	沖縄県遺族 連合会婦人部	大城　勲	父と兄の戦死と 遺骨収集	228
21	還らぬ人とともに	沖縄県遺族 連合会	金城　和信	慰霊塔建立	230
22	あゝ学童疎開船 対馬丸	対馬丸遭難 遺族会	平良啓子	いかだを奪いあう 大人たち	233
23	市民の戦時戦後 体験記録　第三集	石垣市史 編集室	西里スミ	ﾏﾗﾘﾔ地獄の波照間島	237
24	ふる里と共に	吉野高善	吉野高善	石垣島・ 住民の戦争避難	242
25	戦時遭難船舶手記	伊佐勇蔵	伊佐勇蔵	遭難記	248
26	海鳴りの底から	戦時遭難船舶 遺族会	上間幸弘	淋しそうに去って いった兄を偲んで	255
27	沖縄平和祭 ９５実施概要	沖縄県総務部	前堂美幸	「糸数壕」の平和学習	256
28	沖縄平和祭 ９５実施概要	沖縄県総務部	崎山用史郎	戦争五十年を考える	257
29	沖縄平和祭 ９５実施概要	沖縄県総務部	渡嘉敷益子	人間の絆	259
30	沖縄平和祭 ９５実施概要	沖縄県総務部	上里洋志	命どぅ宝	260
31	沖縄平和祭 ９５実施概要	沖縄県総務部	星　　光	「戦後五十年」 過去から学ぶ	261
32	沖縄平和祭 ９５実施概要	沖縄県総務部	川田友美	詩　六月の風の中で	262

伊江島女子救護隊

大城シゲさん

十七～二十四歳の女子で編成

沖縄戦で悲劇の部隊と呼ばれて、あまりにも有名なのが「ひめゆり部隊」。年端もいかない女学生が無惨にも戦火に巻き込まれ、短い生涯を閉じた。こうした少女、婦人は県内いたる所にいた。女子救護隊もその一つだ。伊江島でも昭和二十年一月に、十七歳から二十四歳までの未婚の女子青年を集めて救護隊が編成された。

「昭和十八年ごろから、週数回の青年学校が開かれて島に駐屯していた軍医を中心に応急処置の講習を受けていたが、戦局も押し迫った昭和二十年一月には、救護隊が編成されて、疎開も禁止されました」。兵隊とともに切り込みにも参加しながら「六日戦争」を生きのびた大城シゲさん（五六）＝伊江村字川平一二二＝は証言する。

大城さんの記憶によると、女子救護隊はおよそ百人。各中隊、小隊、分隊に二人ずつ配置された。軍の炊事、雑役に当たっていた二十五歳以上の婦人協力隊とともに米軍の上陸を迎えた。

大城さんが配属されたのは諸江晴美大尉の指揮する独立速射砲隊の一分隊。三月ごろに配備され伊江島タッチュ－のふもとにある壕内にたてこもった。救護班とはいいながら、配られたのはヨ－チン、ガ－ゼ、包帯だけで、負傷兵に対する治療にはならない。仕事は砲弾の運搬と、切り込みでキズを負った兵隊を壕内に運び込むことだった－と大城さんは述懐する。

「米軍上陸後、すぐに始まった激しい戦闘の中、歩兵隊に配属された人らの多くは兵隊なみに切り込みの主力となって戦死した。速射砲隊にいた私たちの仕事は弾運びが主」と話す。人の運の不思議さを思わざるを得ない言葉だった。

上陸三日目、十八日になって、大城さんらの隊も初めて学校台地争奪の切り込みを行った。もちろん大城さんもついて行った。やがて、「負傷兵を護送せよ」と命令を受けて壕に帰った。大城さんの切り込みはその日の一度きり。二十一日最後の攻撃の時「生きている者は全員参加」の命令にも外された。ほかに足を負傷し、歩けなくなった福岡県出身の佐藤上等兵と、避難してきていた住民三十人ほどが壕にとどまった。

大城さんは言う。「みんな出て行ったきり帰ってこなかった。片足に弾を受けていながらケンケンして出て行った兵隊のことは今でも忘れない」と。

大城さんらと壕内に残った佐藤上等兵は諸江隊長から「最後は自決せよ」と命ぜられ、砲弾を積み上げた箱に陣どっていた。夜、眠る時、「明日の朝にはいないのだから」と言って妹や友人の手を取り合って休んだ大城さんら地元住民だが、佐藤上等兵は「兵隊でない君たちは死ぬ義務はない」と自決せず、おかげで命をながらえた。同上等兵は壕内にいた多くの住民の〃恩人〃とも思える人だが、「戦後、郷里に復員して、炭坑で亡くなったと聞いている」と寂しそうに話す。また、「あの戦では本当に立派な人が死に過ぎた」とも。

「兵隊はみな優しくてね。若い私たちをよくかわいがってくれました。そんな人たちが負傷してきているのに、傷口にヨーチンを塗るだけなのが心苦しかった」と忌まわしい思

い出にふれる大城さん。「早く長い眠りにつきたいよ」と話していた二十代半ばの兵隊の言葉は、本当に悲しかった。遺言を残したがっていたようだが、「どうせ、みんな死ぬ身。聞く耳さえ持たなかった」と振り返る。口数も少なかった。

伊江村史によると、救護隊に編入された女子青年は百六十人。そのほとんどが戦死し、生き残ったのは大城さんを含め九人にすぎない。「青春時代は戦争に追われ、何一つついいことはなかった」とつぶやく大城さんに戦中、戦後の苦労がしのばれた。

【『証言－沖縄戦』（琉球新報社刊）所収】

教育勅語を守って

糸満市　久保田　千代子

大戦当時、夫も私も摩文仁村国民学校に勤務しておりました。

学校では、三年以上の児童が、ほとんど毎日、軍への協力作業に出ました。最初は、道路の補修、後では敵の戦車進入の妨害をするための断崖づくりの石集め、石運びでした。

南の海岸から上陸するであろう敵軍の戦車が、村に入り込めないように石を積み上げました。でき上がった断崖を見て村中の人は、敵の戦車は必ず妨害阻止できると信じ、語り合いました。

だんだん空襲は激しくなり、昭和二〇年三月上旬、夫は防衛隊長として山三四八三部隊に召集されました。

昭和二〇年三月二三日、卒業式をやっとの思いで終ったころ、夕方近く南の港川方面からものすごい艦砲射撃が始まりました。

村人は、それぞれの防空壕に避難し、まんじりともせずに戦々恐々と過ごしましたが、夜が明けてみると、一晩のうちに、村の家々や学校など焼け野が原になっておりました。

私の家族ですが、夫は防衛隊、弟は中国出征で一九年に中隊長として戦死、次の弟は熊本県へ疎開、残っている父母、夫の妹、私の子ども二人（三歳と三カ月の男の子）六人で、学校裏の職員壕に行きました。ここには、学校の大切な書類、教育勅語などを避難させてありました。

翌二四日には米軍の上陸が予想されるというので、村民は国頭方面へ行くのが安全だという役場からの指示がありました。

私たちは家族で相談し、移動せずにこのまま残ることに決めました。幼い者を連れていくのは大変だし、家族一同そろってここで最後を遂げてよいのだと考えました。

それに、日本は負けはしないという考えが心の底にありました。そしてただ命ながらえるだけでなく、戦いを勝利に導くために軍の手伝いをでき得るかぎりやろうと決意しました。野菜集め、水汲みなどでしたが、そういうことも死を覚悟しての作業でした。

しかし、そのうちに、この壕は軍が使用するから民間の者は出ていくようにと命令されました。

仕方なくそこを出た私たちは、東風平村の富盛の東、八重瀬岳の松林の中のお墓の中に入ることができました。前のほうに大きな厨子がめなどが並んでいたけれど、奥は空いて

いて結構な隠れ家でした。死んだ方々と仲よく暮らしているという気持ちでした。ここに住んだのは約二か月でした。

すぐ隣の墓には負傷兵や防衛隊がいました。父は元気で、兵と一緒に水汲み野菜集めに精出して働きました。

私と妹は、子どもを母にあずけて、兵隊の炊事を手伝ったり、負傷兵の世話を一心にやりました。この辺の土地にくわしいので何かと役に立つことが多くありました。

しかし、私には、とても心にかかる重い任務がありました。それは、教育勅語を自分の命よりも大切にとあずかっていたことでした。

教頭先生が国頭方面へ行かれるときに置いていった大事なものでした。それは残留した私が守らなければいけない大事なものでした。私は、自分の命が今無事でいると気づくと同時に教育勅語は大丈夫だろうかと、いつも確かめていました。

戦争はだんだん激しくなり、みな南へ南へと移動し始めました。八重瀬岳でも爆撃や艦砲射撃で、兵も村人も死なれる方が多く、私たちもここで終わりかと思いました。

やがて、また、ここでも、軍の命令がきました。「ここ一帯は軍が使用する。お前たちは、歩行できる兵隊を、米須の陸軍病院に案内してもらいたい」ということです。

私たちは、ひゅうひゅうと雨のように落ちる弾の中を、木の下を這ったり、畑のみぞを這ったりしながら、負傷兵とともに、家族一同てくてく歩きました。その時もこの腕に、大事な教育勅語をあずかっているという責任感が私の頭の中にありました。

米須の部落に着いてみると、学校裏の壕が野戦病院になっていることがわかり、負傷兵を案内しました。

その時、急に激しい爆撃の音が聞こえ、私が背負っている長男（衛）の背中にひゅうと当たったようです。一声泣いただけで即死でした。死んだ子を背負ったまま、泣き泣き壕へ兵隊を案内したのでした。

亡くなった子は、学校近くの畑のくぼみに埋め、父が土をかぶせて葬りました。わが子の永遠の眠りの日を考えると、今でも心に痛みを覚えます。

私たちは移動の連続で、一日中何も食べないことがありましたが、しまいには日本は勝つのだとすべてを苦にせずに耐えておりました。

ある日、教育勅語をさがして来られた教頭先生にばったり出会い、私は、大事なあずかりものを渡すことができました。

教頭先生は、教育勅語のことが気にかかり、妻子を国頭に残し第一線を乗り越えて、南の米須まで私をさがして来られたのでした。

あの岩陰からこの木の下へと移動の中での再会では、話もできず、ただ教育勅語をお渡しし、教頭先生はしっかりと受け取られて別れたのでした。

先生の無事を祈る間もなく、私たちは次の隠れ場所を求めなければなりません。

やっと見つけた所が、焼け跡の製糖工場の大鍋の下の穴でした。ここでも直撃を受けるとおしまいですが、とにかくここに身を隠すことにしました。近くの米須平野を見ると、迫撃砲の火の海でした。

忘れもしない六月一九日の晩、急にあたりが静かになりました。いよいよ援軍が来たなと思いました。まさか敵兵上陸などとは考えたくもありませんでした。

しかし、朝になって「デテコイ」と呼ぶ声は、アメリカ兵だったのです。私たちは、顔

中に鍋のすすをぬりつけて出ました。

六月二〇日、私たちは米兵の捕虜になり、長い日中を歩きました。着いた所は、豊見城村の伊良波の前の畑の中でした。

そこで一晩野宿し、翌日石川のほうに連れていかれました。これから一年余、海水を煮て飲んだり、苦しい生活が続きました。以前、教員の経歴のある私は、現物給付という形で教員になりました。

そのころに聞いたのですが、教頭の伊野前先生は、ひめゆりの塔の近くで教育勅語とともに戦死されたそうです。

忘れようとしても忘れることができない悲痛な思い出です。もう戦争は全くいやです。

【『ぶっそうげの花ゆれて』（退職教職員会婦人部編、（株）ドメス出版）所収】

山原避難記

豊見城村　与儀　春子

沖縄戦開始

三月二三日の早朝から大空襲が始まり、爆弾投下の音が恐しいほど続けざまに聞こえた。すぐに家族四人とも近くの壕に身をひそめた。無気味な鑑砲の音も響きわたり、一〇・一〇空襲以上に爆弾投下が激しいので、「いよいよ沖縄戦の火蓋が切られた」と、直感し、恐怖の気持ちをなるべく平静に保つように努め、家族を励ました。

夕方、やっと空襲はやんだが、そのまま壕の中で一夜を明かした。

昨日に続き、空襲はますます激しくなり、恐怖感におそわれた。ただ呆然として神に祈るのみで運を天にまかせて、その日は無事助かることができた。夕方壕を出た。

「米機動部隊が上陸する恐れがあるので、住民は、山原方面へ避難するように」との命令がくだったためである。家族をなだめ、自分の心を励ますように、避難の用意をした。一〇・一〇空襲で着のみ着のままになったので、非常用かばんのみの荷物であった。

あわれな避難民の姿

非常用かばんの中に、食糧も少し入れ、まず用意したおにぎりを食べて、晩の八時頃、那覇（久米町）を出発して、泊方面から北へ北へとなれない夜道を歩き続けた。

安謝あたりから、疲れて眠る子を背負い重いかばんを前にさげているため、歩みもにぶる。

伯母（七二歳）は、杖にすがってとぼとぼ歩く。母（六〇歳）は、元気者で手荷物のなべ、かまを持ち、左手で伯母の手を引いて歩く。このあわれな姿を見ると、涙ぐましく気の毒でたまらないが、戦争ゆえしかたがなかった。

道いっぱいの避難民たちはみな、無言の歩みを続けている。左右に幼児の手を引き、背中に赤ちゃんを背負って歩く母親や、とぼとぼ歩く老人の姿なども、あちらこちらで見られるし、迷子や老人の姿を見ても救えないほどみんな自分の家族を連れて歩くのもやっとであった。